

釧路で「道新エコハウスフェア」

寒冷地の暮らしを快適に

省エネルギーや環境に配慮した住宅を展示する「道新エコハウスフェア2018」（実行委、北海道新聞釧路支社主催）が釧路市昭和中央3の特設会場で開催されている。釧路管内の住宅メーカー8社による、こだわりの技術を集めた住宅が並ぶ。寒冷地のエコ住宅には、どのような工夫が隠されているのか。出展社の一部を訪ねて、ポイントを探った。

（中川麻衣子）

出展社で唯一、空気の対流を利用して家を暖める「パッシブ換気」と呼ばれる換気システムを導入している「カイトー商会」（釧路市）のエコ住宅を訪ねた。

「少ない熱源で家全体を効率良く暖めます」。同社の米本晋太郎課長(27)が見せてくれたのは、リビング床下に設置された1台のヒートポンプ式暖房機。これが、住宅1棟をまるごと暖める原動力だという。

仕組みはシンプルだ。まず、暖房機の熱で床下の空気を加熱し、暖まると上昇する性質を生かして家中に暖かい空気を循環させる。住宅は効率良く空気が流れるように計算され、室内各所の通気口から暖かい空気が流れ込む。そのため、どの部屋も均等に暖かくなる設計だ。暖めた空気を外に逃がさないよう、住宅の基礎部分や壁、窓などの断熱性も高い。オール電化住宅と比べて、光熱費を抑えられる利点もあるそうだ。

寒冷地で省エネ住宅を建てる際に重要なのは、断熱性と気密性を高めて室内の熱を逃がさないこと。近藤工務店（中標津町）は「超高気密・高断熱の家」をうたう住宅を出展した。

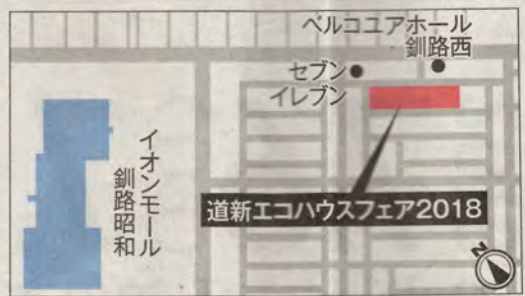
同社のエコ住宅は「FPパネル」と呼ばれる硬質ウレタン製の断熱パネルを使用している。パネルの厚さは通常105ミリだが、今回はさらに45ミリの断熱材を付加し、床にも厚さ200ミリの断熱材を入れている。パネルの厚さを加し、床にも厚さ200ミリの断熱材を入れている。パネルの厚さを加し、床にも厚さ200ミリの断熱材を入れている。



パッシブ換気システムを取り入れている「カイトー商会」のエコ住宅。床下のヒートポンプ式暖房機1台で空気を暖める。

暖かい空気循環／高い断熱、気密性

さらに気密性も高めようと、断熱パネル同士やパネルと柱の間に隙間ができないように専用のテープでふさぐなど、暖かい空気を外に漏らさない家づくりにこだわった。釧路店の加茂雄太店長(29)は「断熱性と気密性を高めたことで室内の暖かさが長続きする。結果的に暖房を使う回数が減るなど、断熱性の向上に力を入れた。」



南と西からの太陽光を室内にたっぷり取り込める大きな窓が特徴の「ウッドディークラフト」のエコ住宅。南と西から差し込む太陽の光と熱を室内に十分に取

り、光熱費の削減にもつながります」と売り込む。家を建てる方角や間取りを工夫することで、自然エネルギーを最大限に活用しようという住宅もあった。

「ウッドディークラフト」（中標津町）が出展したのは、1階のリビングや2階の寝室が、道路に面して斜めに暖かさが長続きする。結果的に暖房を使う回数が減るなど、断熱性の向上に力を入れた。

室内には、床など随所に天然の木材が使われているのも印象的だ。同社の多田さおりさん(50)は「体感的に暖かみを感じられるのも、木を使うメリットです」と話す。ぬくもりを感じられるデザインも、北国でのエコ住宅を考える上でポイントになりそうだ。



「近藤工務店」が断熱材に使用する「FPパネル」の一部。「防水性や防湿性も高く、壁の中で結露が起らないのもメリット」と加茂雄太店長はすすめる。

道新エコハウスフェア2018は27日まで。平日午後1～5時、土日前10時～午後5時。水曜休み。問い合わせは事務局の北日本広告社0154・22・0211へ。